

子どもたちの明日

Children, Our Future



2016年3月

117号

目次

- ・ 保育事業 25 年目の試み 1頁
- ・ アンコールバーン村を訪ねて 2頁
- ・ 国立博物館でのピダン展はじまる 3頁

1 保育事業25年の試み

2015年秋、バンキアン保育所、プレイタウ保育所に卒園児2名が研修生としてやってきました。約15年前に両保育所を卒園した、バンキアン村のピアスナ・ソピェクニャトさん(21歳)とプレイタウ村のパ・スレイモムさん(22歳)です。保育所の奨学生としてプノンペンにある国立幼稚園教諭養成学校に入学した2人は、2015年8月に全課程を修了しました。現在行っている保育所での研修を終えた後は、当会カンボジア事務所(CYK)で保育専門家を目指して働く予定です。今号ではソピェクニャトさんをご紹介します。

保育所での思い出: 保育園に通って良かったのは食べて、勉強して、お昼寝して、遊べる場所を得られたこと。お父さんは運転手として、お母さんは縫製工場に働いて家にいなかったの、保育所が無ければ行く所がありませんでした。保育所で友だちと遊んで、勉強したことは楽しい思い出で、ブランコとすべり台が大のお気に入りでした。友だちとブランコを取り合って喧嘩したこともありました。

奨学金に応募した理由: 小さい頃から先生になるのが夢でした。高校卒業後、先生になる試験を受けましたが、不合格でした。諦めかけていた時、保育所の奨学金をもらって養成学校に通えば先生に

▶写真中央・優しい笑顔が印象的なソピェクニャトさん。プノンペンに住みたい、働きたいとずっと思っていたので楽しみます。ただ、自身の能力が不十分なので、仕事をうまくやれるか心配もしています。



なれると聞いて、応募しました。

養成学校でのこと: 朝から夕方まで色々な科目の授業があり、宿題もたくさん出ました。特に、指導案を作る授業はとて苦勞しました。けれど、幼稚園実習の時には本当に先生になれるという実感がわいて、とても嬉しかったです。学校には生活態度や時間について厳しいルールがあるので大変でしたが、自分自身が成長したと感ずることができて、また大切な仲間と出会えた学校生活はかけがえのない2年間でした。

働き始めての感想: 自分が通った保育所で先生として働けてとても嬉しい。CYKの教材はとても使いやすく、私も楽しみながら保育ができています。子どもたちも可愛いのでどんなに疲れていても頑張ることができます。ただ、なかなか言うことを聞いてくれない子どもへの接し方は難しいです。

これからの抱負: 子どもたちには「きちんと教育を受けて、立派な大人になってほしい」という想いで仕事に励んでいます。子どもたちには、休まずに保育所に来て欲しい。そのために私たちも教材を増やしたり、保育所や遊具を綺麗にしたりするつもりです。また、今は英語教育が盛んなので、保育所に英語の授業を

取り入れればもっと多くの子どもが保育所に来てくれると思います。私が一生懸命働く姿が、子どもたちのお手本となるように仕事をするつもりです。

ソピェクニャトさん、スレイモムさんは2016年3月に保育所での研修を終え、4月からはCYKで保育事業アシスタントとして勤務します。CYKに日本人保育アドバイザーを置かなくなってからというもの、非常勤職員のヨス・オー・アルンが教材開発、村の幼稚園モニタリングや保育者研修を一手に引き受け、子どものことを一番考えた保育を進めてきました。今後は彼女がこれまで培ったノウハウや知識を若い2人に引き継いでいく予定です。2人にはアルンも大きな期待を寄せており、「やる気も知識もある2人に、私の長年の経験を教えてあげられるのはとても嬉しいです。子どもの成長を促す教材の作り方だけでなく、新しく教材を開発するアイデアも出せるように、2人を指導したいです」と話します。当会の新職員となる2人をぜひ応援してあげてください。

次号ではもう一人の奨学生・スレイモムさんの紹介と、いよいよ始まる2人の新生活の様子をお知らせする予定です。

2

アンコールバーン村を訪ねて



(左)「波尔・ポト政権の時代もその後も毎日毎日、本当によく働きました」と語ってくれたイーさん。昔の藍染め方法を知る、貴重な存在だ。

(右) ポル・ポト政権の時代、同じグループでクロマーを製作していたというヨムさんとイーさんは藍染め技術指導にも協力してくれた。「おたふく風邪になった時には、藍染めした糸を煎じて飲むのが効く」と、カンボジア独自の、そして自然染色だからその習慣も教えてくれた。

アンコール時代の古いお寺や遺跡に見守られたカンボジア・コンポンチャム州アンコールバーン村。現在でも伝統的な木造の家が立ち並び、内戦前の農村の生活を見ることができます。幼い難民を考える会 (CYR / CYK) は、2012年よりこの村で藍染め技術復興に取り組んでいます。今号では、藍染めの村であるアンコールバーン村に60年以上暮らし、歴史を見てきたお年寄り、サー・イーさん (81歳) に話を聞きました。

19歳の時、アンコールバーン村のスーン・ミックと結婚するために村にやってきました。33歳の時に夫が亡くなり、義理の母親と2人、藍染めのクロマー^{注1}を織り、村の人に売ることによって5人の子どもたちを育てました。メコン川流域の肥沃な土地に恵まれたアンコールバーン村では藍の葉が良く育ち、昔は藍染めが盛んに行われていました。家の近所でも藍染めの織物をしている人がいましたし、泥藍を

作り販売することで生計を立てる人も多くいました。藍の染液にやし砂糖や熟れたバナナを加えたり、お酒の変わりに灰汁を使ったりして藍染めをしたことをよく覚えています。自宅には今でも、当時使っていた大きな瓶が残っています。

1975年に波尔・ポト政権になってからも村の藍染めは続けられました。当時は、全国民が子どもたち、15～20歳の若者、結婚している人、そして高齢者などというように4つのグループに分けられ、強制労働に駆り出されました。村で寝泊りができるのは老人と乳児のいる女性のみ、他の人たちは労働場所での生活を強いられ、家族と一緒に暮らすことは許されませんでした。食事はいつもお粥で、これもグループごとに食堂で食べたものです。私たち村人も5人のグループに分けられました。私はグループのリーダーで、ボクナウという北の地域で栽培された綿を糸にして、藍で染める仕事を与えられ、毎日3～5キロの

綿糸を染めました。他の4人は、その糸でクロマーを1日1枚ずつ織りました。完成したクロマーは「オンカー」^{注2}に納め、集団で農作業に従事するグループの人々が使っていたようです。グループ5人のうち、2人は既に亡くなってしまいましたが、ヨムさん (88歳)、ロンさん (91歳)、私の3人はずっとアンコールバーン村に住んでいます。

内戦が終わってから10年間ほどは義母と一緒に藍染めを続け、クロマーを織ってはメコン川の反対側にあるオーレトナオット村まで売りに行きました。藍染めのクロマー1枚で44キロのお米や、洋服と交換できました。内戦直後は衣類が非常に高価で、タイ国境の市場で手に入る密輸品の綿布1枚が3.7グラムの金と交換できた時代です。それほどまでにカンボジア国内には何もありませんでした。しかし、その後は織物で得られる収入が減ったため、織物を辞めて農業で生計をたてようとトウモロコシなどの栽培を始めま

した。また、他の人も大変な労力と根気が必要な藍染めを辞めて、より多くの現金収入が得られる仕事を選ぶようになり、ついには藍染めも廃れてしまいました。内戦の後にはみんな、食べることに必死だったのです。

アンコールバーン村をCYK職員が初めて訪れたのは2007年のこと。職員のベン・ソパールが「祖母の妹で、藍染めをしていた人がいる」と紹介してくれたことが、現在の事業に繋がっています。泥藍作り・藍染め研修を受ける村の藍染めグループには、イーさんの孫であるタイさんも参加して、貴重な染色技術を受け継ごうとしています。当事業は公益財団法人日本国際協力財団より3年間の助成を受け、藍染め専門家の派遣や研修を行い、2014年度には綿糸と絹糸の藍染め技術の復興に成功しました。

2016年度より、当事業は新しいステージへと入ります。藍染めを行う村

人のグループを対象に織物技術の研修を実施、藍染めのスカーフを製作して村を訪れる観光客に販売する計画です。近年、アンコールバーン村には古いお寺や伝統的な農村の生活を見ようと多くの外国人観光客が足を運んでいます。村人はハンドメイドの藍染めクロマーを販売することで安定した収入を得て、藍染め技術を将来に残したいと考えています。ぜひ、村人のさらなる収入向上、そして伝統文化の保全のため、当事業への皆さまのご支援をお願いいたします。

(注1) クロマー：カンボジアで広く活用される万能布。タオル、頭に巻いて日除け、また荷物入れとして使われるなど、変幻自在の大判綿スカーフ。

(注2) オンカー：カンボジア語で「組織」を表す。ポル・ポト政権時代、政権を動かしていた幹部をオンカーと呼び、オンカーはカンボジアの一切を支配し、管理する組織だと言われていた。



3

国立博物館でのピダン展はじまる

2016年1月11日、カンボジア・プノンペンにある国立博物館にて「カンボジア伝統絹絵絣〜ピダンの保全と発展〜」と題した、CYK主催の展示会が開幕しました。

かつてはタイなど近隣諸国にも輸出をするほどに栄えたカンボジアの織物文化。しかし、長年の内戦により伝統技術を持つ人は失われ、生き延びた人も多くが織物を辞め、より多くの現金収入を得られる仕事を求めました。その結果、ピダンや絣織りの染織技術を持つ人は減り、そして残った織り手も高齢化が進んでいます。現在では、織り方はもちろん、ピダンに描かれる模様の意味を知っているのはお年寄りの方のみ、若者に至ってはピダン自体を知らないという現状があり、伝統文化の存続が危ぶまれています。若者に伝

統的な織物文化を伝え、そして次世代へ技術を伝承していくことの必要性が高まっています。このような状況のなか開催されるピダン展には、当会カンボジア人職員の次のような想いが込められています。

- ・伝統織物であるピダンをカンボジアの人だけでなく、世界中の人に知って欲しい
- ・村の織り手たちが自身の持つ織物技術に誇りを持ってほしい
- ・政府が進める伝統的な織物文化の保全に貢献したい

国内外からの訪問者が多い国立博物館で、カンボジア人職員が中心となって展示会を開くことで、自国の伝統文化を若い人たちに伝えたいという強い想いが詰まったピダン展についてお伝

えます。

開幕式

1月11日夕方、国立博物館には100名以上のゲストが集まり、ピダン展開幕式が行われました。開幕式では、駐カンボジア日本大使、カンボジア王国文化芸術大臣、プノンペン大学副学長をはじめ、国内外の多くのゲストが出席したほか、メディアの取材も入り、にぎやかな式典となりました。式典では、来賓の挨拶に続き、CYK所長チャン・スレイも挨拶し、村の織り手たちが持つ技術の希少性、伝統文化継承の必要性、そして自国の伝統文化を将来に伝えていかなければならないという、強い想いを述べました。その後、ピダンを見た来賓の方より「以前よりもピダンの織り手の技術が向上



伝統的絵柄のピダンを藍色で復元した、スレイネットさん。若く、才能あふれる織り手の1人だ。



している」、機織りが盛んなチソール山地域で織物に携わってきた方も「これまで多くの織物を見てきたが、これほど複雑なピダンを織る人はなかなかいない」とのお褒めの言葉を頂きました。また、開幕式には、ピダンを製作した織り手たちもタケオ州トロピエンクラサン村から2時間半かけて駆けつけました。織り手たちは自らが製作したピダンに描かれる模様や製作方法をゲストに説明したり、文化芸術大臣とも言葉を交わして写真を撮ったりするなど誇らし気な表情でした。

展示中のピダン

展示会には新しい模様のデザインから

伝統的絵柄の復元まで、様々なピダンが用意されました。当会織物センター所長兼トレーナーであるスーン・ミットは自らデザインしたオリジナルのピダンを製作、織り手であるペッ・キムさんは内戦で失われたピダンを復元、チャイ・スレイネットさんは製作に膨大な時間と高度な技術を要する藍染めのピダン製作に挑戦しました。これらは内戦前に国立博物館に所蔵されていたという、伝統的なピダンの模様を復元したものです。スレイネットさんが製作したピダンは1970年代に国立博物館で撮影された写真をもとに藍染めにアレンジして製作しました。上部には生命を表す守護神「ナーガ」と船、

そして真ん中には生命の樹とライオンが描かれた、伝統的な絵柄のピダンです。

ピダン展が開幕してから1ヶ月半、展示会を見た多くの観光客がCYKショップ「ピダंकメール」を訪れています。展示会を通して多くの人々にカンボジアの織物の魅力を伝えることができたこと、手ごたえも感じています。今回のピダン展が内戦により途絶えかけた織物文化の復興と、現代の私たちがその貴さを知り次の世代に伝承され続けることへの一助となることを願っています。

CYR 情報

第15回定時総会・報告会のお知らせ

日時 2016年5月28日(土)
第15回定時総会 13:00～(開場12:30)
活動報告会 14:30～

場所 聖心インターナショナルスクール(聖心女子大学内)
東京メトロ日比谷線「広尾駅」2番出口下車、徒歩5分

※総会は会員の方のみとなりますが、報告会はどなたでもご入場いただけます。

銀座煉瓦画廊・展示会のお知らせ

藍染めの製品を中心とした、夏らしい展示会です。皆さま、ぜひお越しください。

日時 2016年7月19日(火)～24日(日)

場所 〒104-0061 東京都中央区銀座4-13-18 医療ビル2F
(新歌舞伎座横・木挽町通り)

TEL/FAX 03-3542-8626

子どもたちの明日 117号

発行日：2016年3月16日 発行者：廣戸直江

特定非営利活動法人幼い難民を考える会

東京事務所 (CYR)

〒110-0016 東京都台東区台東1-12-11 青木ビル2A

TEL: 03-6803-2015

FAX: 03-6803-2016

Email: info@cyr.or.jp

URL: http://www.cyr.or.jp/

プノンペン事務所(CYK)

#170, St.63, Boeung Keng Kang I, Khan Chamkarmorn, Phnom Penh, Cambodia

TEL: (+855) 23 210849

FAX: (+855) 23 210849

Email: info@cyk.org.kh

URL: http://cyk.org.kh/

幼い難民を考える会 (CYR) は認定NPO法人です。
ご寄付は税制優遇措置の対象となります。